ヒューマンJournal

自由同和会中央本部機関紙

URL:http://jiyuudouwakai.jp
E-mail:dowakai@khaki.plala.or.jp

第190号

発行所　自由同和会中央本部
〒102　東京都千代田区
-0093　平河町２-３-２
ＴＥＬ　03-5275-3641
ＦＡＸ　03-5275-3642
編集発行人　平河　秀樹
発行日　年４回（6・9・12・3月）
定価　１部500円（送料別）
年間2,000円（送料込）
振込　三菱東京UFJ銀行麹町中央支店
（普）0366528
口座名　自由同和会中央本部事務局
平河秀樹

部落解放同盟員が部落差別をねつ造

部落解放同盟が部落差別の根深さ厳しさの表れと位置づけていた、福岡県立花町の「連続差別ハガキ事件」の犯人が7月7日逮捕された。

逮捕されたのは、被害者とされていたA氏であったことから全国に衝撃が広がった。

事件の概要は、平成15年12月から今年の1月までに合計44通の匿名による差別的内容のハガキや封書がA氏の勤務する立花町や関係機関に送られたもの。

A氏は、平成14年に立花町の嘱託職員として採用されており、警察の取り調べで「差別を受けていると嘱託職員の契約が解除されにくいと思った」と採用の継続が目的だったとしている。

この一報を聞いて、やっぱり、またかという思いと、非常に強い怒りを覚えた。

部落差別をなくすために活動している団体の会員が、部落差別をねつ造することなどあってはならないことで、どのような理由があろうとも許されるものではない。

関西や中国地方の不祥事につづき、今度は九州での不祥事では、この不祥事を起こしている団体に、何らかの問題があると言わざるを得ず、組織の抜本的な改革を行い出直してもらいたい。

部落解放同盟は、逮捕された直後の8日に出した緊急声明では、長時間にわたる取り調べで自白したとして、いかにも「冤罪」であるかのような内容であったことから、同盟内部の良識派などから批判されたことで、7月22日に開催された福岡県連第60回定期大会において、「第1次見解とお詫び」とする文書を公表した。

この文書では、「いまだに彼は拘留中であり、事件の全容、真相が解明されてはいませんので、それを受けての組織の総括を含めた『最終見解』は後日明らかにさせていただきますが、彼が自作自演であると自白したこと、そして逮捕されたということは事実であり、そのことが与える影響ははかりしれないものがありますし、また現段階では、自作自演した可能性は極めて強いと言わざるを得ません。そしてそうであるならば、まさに解放運動に対する重大な背信行為でしかありません」と自作自演であることを認め、「今回の問題を厳しく、かつ重たく、真摯に受けとめ、今回の問題の真相究明に全力をあげるとともに、彼の行為を見抜けなかった私ども当該県連・地協としての組織的な総括と、再発防止のための今後の方向性などを整理し、明らかにしていくことを決意しております」と組織ぐるみではないとし、「今回の問題を引き起こした個人を生み出した組織的弱点を抉り出しながら、組織と運動の再生にむけて、重大な決意をもって臨んでいく所存であります」としている。

部落差別の現状を、いまだに厳しく根深いものがあると、差別を強調している間は、差別のねつ造事件を産む土壌があることを理解しないと、再発の防止にはならないであろうと思われる。

平成21年度幹部研修会及び定期中央省庁要請行動

日　時　11月19・20日（木・金）午後2時より
場　所　自由民主党本部9F　901号室
要請省　法務省・文部科学省・厚生労働省・国土交通省

今号の内容

立花町連続差別ハガキ事件……１P
組織委員会……２P
都府県本部関係……２P
自由同和会の声明……３P
宮崎学さんの長期連載……４P

組織委員会

組織委員会（委員長　藤本周一）では、加入が保留になっている、広島県本部再建委員会と群馬県人権ネットワークの役員から、最近の活動状況を聞くため、6月12日午後1時から、大阪市内の「大阪ガーデンパレス」において委員会を開催した。

両団体からヒヤリングの結果、一部の委員から時期尚早との意見もあったが、賛成多数で理事会へ加入を認めることを提案することに決定した。

ヒヤリングを行う組織委

今後の予定

10月2日	理事会・執行部会
10月26日	女性部理事会
10月26日	青年部理事会
11月19日	幹部研修会
11月20日	中央省庁要請行動
平成22年1月	理事会・執行部会

全隣協総会へ出席

全国隣保館連絡協議会（会長　中尾由喜雄）は、第39回総会を5月19日午後1時より都内の「虎ノ門パストラル」おいて開催した。

総会には、平河秀樹中央本部事務局長が出席し、共闘のあいさつを行った。

全人教設立総会へ出席

全国同和教育研究協議会は、6月17日付けで「一般社団法人　全国人権教育研究協議会」（代表理事　石村榮一）として認証を受けたことに伴い、設立総会を7月29日午後2時より大津市内の「琵琶湖ホテル」において開催した。

総会へは、上田卓雄　中央本部会長と平河秀樹　事務局長が出席し、上田会長が激励のあいさつを行った。

都府県本部関係

岐阜県本部（会長　橋本敏春）では、第28回大会を5月15日午後1時30分から、岐阜市内の「岐阜会館」に120名を集め開催した。

大会では、ぎふ人権文化研究所主宰の桑原律さんが、「『普遍的な人権感覚』をはぐくもう」のテーマで基調講演を行った。

静岡県・人権地域改善推進会（会長　天野　一・県議会議員）では、第12回総会を5月31日午後1時30分から、静岡市内の「もくせい会館」に120名を集め開催した。

総会では、吉田町教育長の黒田和夫さんが、「身近な人権」のテーマで記念講演を行った。

東京都本部（会長　川上高幸）では、平成21年度大会を6月19日午後1時から、千代田区内の「憲政記念館」に500名を集め開催した。

大会では、作家の宮崎学さんと、平河秀樹　中央本部事務局長が、「同和運動の今後を占う」のテーマで激辛対談を行った。

福岡県本部（会長　上田卓雄）では、第21回大会を6月28日午後1時30分から、北九州市内の「北九州ハイツ」に250名を集め開催した。

大会では、平河秀樹　中央本部事務局長が、「今後の運動の方向性について」のテーマで記念講演を行った。

大阪府本部（会長　阪本孝義）では、第23回大会を7月11日午後1時から、大阪市内の「ホテルアウィーナ大阪」に130名を集め開催した。

大会では、「住民参加と人権の街づくり」のテーマで、CASEまちづくり研究所代表の寺川政司さんが記念講演を行った

千葉県本部（会長　木村由彦）では、平成21年度大会を7月12日午後1時30分から、柏市内の「東葛テクノプラザ」に350名を集め開催した。

大会では、平河秀樹　中央本部事務局長が、「同和団体の今後の活動について」のテーマで記念講演を行った。

京都府本部（会長　上田藤兵衛）では、第24回大会を7月18日午後2時から、京都市内の「ルビノ京都堀川」に450名を集め開催した。

神奈川県本部（会長　天野二三男）では、第23回大会を8月8日午後1時から、小田原市内の「生涯学習センター」に180名を集め開催した。

大会では、作家の宮崎学さんと、平河秀樹　中央本部事務局長が、「同和運動の今後を占う」のテーマで激辛対談を行った。

京都懇話会（京都商工会議所、自由同和会京都府本部・京都市協議会で構成）では、第14回人権セミナーを8月25日午後3時から、京都市内の「京都ホテルオークラ」に300名を集め開催した。

セミナーでは、立命館大学教授のリムボンさんが、「歴史都市の光と影」―町家と部落の京都論―のテーマで記念講演とフリートークを行った。

フリートークでは、自由同和会京都府本部の上田藤兵衛会長と京都市協議会の渡守秀治議長が加わり討論を行った。

「立花町の差別ハガキ事件」について
自由同和会の声明

2009年7月15日

5年間に渡って繰り返し送られてきた差別ハガキについて、やっと犯人と思われる人物が逮捕されたが、逮捕された人物を知り、驚くとともに、大きな怒りを覚えた。

逮捕された人物は、部落差別の被害者であるとされていた人物だからである。

部落差別の被害者になることで、嘱託職員としての自分の身分を保身するために、犯行を思いついたという。

何と愚かな発想であろうか。

自作自演であったことで、再び、部落差別が助長されることを非常に危惧するものである。

福岡県及び立花町は、対策本部まで設置して、部落解放同盟と足並みを揃え、「部落差別は、未だに根深く厳しい」ことの根拠として、この差別ハガキを取扱い、県民に繰り返し啓発を行ってきた。

また、小・中・高の学校でも、この差別ハガキを活用し、「部落差別は、未だに根深く厳しい」と教えてきた。

部落差別のねつ造、でっち上げた事象で県民を教育・啓発を行ってきたことは、県民をだましたことになり、福岡県と部落解放同盟には、部落差別の解消にとって、深刻な事態を惹起させたことへの重大な責任を自覚するとともに猛省を促したい。このことで、部落差別の解消は、10年は遅れるであろう。

福岡県及び立花町、そして、部落解放同盟は、第一に県民に謝罪をすべきである。県民も被害者であるが、私ども全国の同和関係者も同じく被害者である。

部落解放同盟は、冤罪の可能性も否定できないとのニュアンスで緊急声明を出しているが、福岡県や立花町は犯行が確定するまで待つことなく、同和地区への嫌悪感や差別が増幅・拡大する前に早急に謝罪すべきである。

私どもは、全国の各種調査から、同和地区は大きく改善されたことにより、実態的差別は解消し、今や、心理的差別としての部落差別は完全に解消の過程にあり、現在の部落差別は、「実態が伴わない過去の亡霊・幻想での差別」と位置付けている。

「部落差別は、未だに根深く厳しい」とする根拠は、今や完全に崩れており、運動を存続させるための論議であるが、特定の団体を偏重する歪な同和行政が今回の事態を招いたもので、透明性を確保した中での同和行政を終結のための見直しと、教育・啓発の内容の抜本的見直しが、県民への最終的な謝罪になろう。

今回の事案は、同和運動史に大きな汚点を残すことになると思われるが、以前、部落差別のねつ造・でっち上げがばれ、部落解放同盟の支部長が自殺している。同じようにならぬよう祈りたい。

宮崎学さんの長期連載「融和運動の再評価」

当面の掲載予定

「融和運動の再評価」

1話　解放と改善　185号に掲載
2話　全国水平社と南梅吉　186号に掲載
3話　任侠と水平運動　増田伊三郎のこと187号に掲載
4話　任侠と水平運動　今田丑松のこと　188号に掲載
5話　階級的水平運動の弊害　189号に掲載
6話　土着の社会改良　留岡幸助のこと　今号に掲載
7話　官動かす　三好伊平次のこと　191号に掲載予定
8話　自彊と解放　岡本弥のこと　192号に掲載予定

プロフィール

宮崎　学（みやざき・まなぶ）

1945年、京都府生まれ
早稲田大学法学部中退

1945年、京都・伏見のヤクザ、寺村組組長の父と博徒の娘である母の間に生まれる。

早稲田大学在学中は学生運動に没頭し、共産党系ゲバルト部隊隊長として名を馳せる。

『週刊現代』（講談社）記者を経て、家業の解体業を兄とともに継ぐが倒産。

その後、グリコ・森永事件では「キツネ目の男に擬され、重要参考人Mとして警察にマークされるが、事件は2000年2月13日に時効を迎え真相は闇に消えた。

1996年10月、自身の半生を綴った『突破者』（南風社、幻冬舎アウトロー文庫）で、作家デビューした。

2005年には、英語版『TOPPA MONO』も翻訳出版された。

近年は、警察の腐敗追及やアウトローの世界を主なテーマにした執筆活動を続けている。

(MIYAZAKI manabu official website) より

融和運動の再評価　6話

土着の社会改良

福留幸助のこと

宮崎　学

水平社内部あるいはその周辺にあった、融和を全面的に否定しないで解放に生かそうとする動きを再評価しなければならないことを前回まで見てきたが、それだけでなく部落のまったく外から始まった融和運動についても、評価すべきものがあった。

明治時代に監獄制度の改善、非行少年の教育などの社会事業に先駆的に取り組んだことで知られる留岡幸助がおこなった部落改善事業がその一例である。留岡は若いときにキリスト教の洗礼を受けていたが、北海道空知の監獄で教誨師をしていたときの経験をきっかけに「人道」という観点から部落問題に目を向けていった。そして、日露戦争頃から政府が地方改良運動の一環として部落改善政策に着手すると、これを積極的に推進するために力を尽くしたのだ。

部落解放同盟などは、こうした留岡の努力を「政府の融和事業の枠を超えるものではなかった」と評価しているようだが、私はそうは思わない。確かに、このときの内務省の部落改善政策自体は、基本的に上から恩恵を施して部落をてなずけていこうとするものだった。しかし、留岡は、それを利用して部落の生活条件をよくしていきながら、そのなかで部落民の自覚を高めようとする意図をもっていた。それは、留岡が水平社創立直後に「私は水平運動を起こした人々の心持には満腔の賛成を表するものである」と、雑誌『人道』に載せた「水平運動」という題の文書に書いていたことでもわかる。

その文書のなかで、留岡は水平社綱領の「部落民自身の運動によって」に賛成し、水平運動の底力をそこに見ているし、「人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向かって」というところに「人間は尊貴なものだ」という主張を見て、大いに感動している。こうしたキリスト教にもとづく自立した主体性の尊重を戦前の左翼は「観念的」として排除したのだ。

留岡は単なる観念論者ではなかった。彼は水平社の解放運動を精神運動として必要なものと位置づける一方で、部落改善運動を物質運動としてこちらも必要だとしたのである。そして、精神運動における水平思想やキリスト教とともに、物質運動において彼が立脚点にしたのは二宮尊徳の思想だった。尊徳の思想はインテリの抽象論ではなくて、日本の農村の暮らしに密着した土着の思想だった。そういう土着の考え方をまったく理解できなかった左翼と反体制インテリが留岡を評価できなかったのは当然かもしれない。だが、この「土着の社会改良」というところにこそ融和運動の意味があったのだ。